

疎外について

徳井輝雄

《要旨》

マルクスの疎外概念を検討することにより、現代の教育問題、公害問題の根底にあるものを考える。

1) はじめに

公害問題が教育の中で展開される中で、公害の根本原因から人々の目をそらすような考え方がみられる。たとえば、小中学生に便所の構造を細く教えようとするのがその一つのあらわれである。問題を「学術」の中に閉じこめようというのである。今一つは、「われわれは車に乗る。それは車が便利で自分が疲れないからであるが、それだけスモッグの原因になる排気ガスを出す。それに消費社会といって、いくらでもゴミを出して川を汚し海を汚しているのに、企業だけせめていのはひきょうだと思ふ。」^⑧ という人々の素朴な感情に乗って説かれる公害不可避論である。文明の発展には公害はつきものだというのである。

これらの潮流に対して真の公害教育をめざすには、生活の体験に深く根ざしながら、なぜ公害が起るのかということを追求することが必要である。これを公害教育における系統性としてとらえたい。それにはどうしても、現代社会の価値観、すなわち、物の見方がどういうものであるかをみていかねばならない。

一方教育全体の問題に目を転じてみよう。現在高校で問題になっているのは、高校進学率の上昇（愛知では93.7%）にともなう、「能力」の「多様化」とそれに対処する教育方法の「現代化」^⑨ であり、いつも言われる受験体制下における知育偏重の詰め込み教育、テスト教育である。テストによって振り分け「多様化」した場合起る弊害には枚挙にいとまがない、ちなみに富山県の父母の間では普工商農という高校の「身分制度」がさきやかれているという。^⑩ 普通科でも教える内容が「現代化」され、それにともなって、クラブ活動のみが生きがいの生徒も生れる。これに対しては普通科内でのコース別一多様化一が対置される。

このような状況の中で、評価法をめぐる議論が起っている。これらの考え方の根底にある能力観、人間観、価値観を考える際、疎外概念に注目せざるを得ない。このような理由から疎外について考えてみる。

2) 疎外概念のもつ現代的意味

現代社会は、公害問題をはじめとして、さまざまな問題の解決をわれわれに迫っている。その一つに価値観の問題がある。人々の考え方が多様化し流動化したとよく云われる。これは物質中心的な考え方がようやく反省されはじめ、新しい価値観を求めて多様化、流動化しているものといえる。

公害の根本的原因は何かと問えば、中・高校生でも企業の利益第一主義とか、人間の利己心と答える。^⑪ 現代のもの考え方が公害をもたらすことはおぼろげながらも感じ取っているのである。鉛入りガソリンの考え方も、燃焼効率（圧縮率）を上げるという、やはり、利益第一主義に通じる考え方である。このようなエンジニアリングの思想が問題視されている。価値観の変更（利益第一主義、効率第一主義、能率第一主義、能力第一主義等々の変更）が、迫られている。このような考え方の変更がなされないかぎり、公害などにも対処しきれない面が出てくる。たとえば従来の考え方のままのエンジニアリングから生れた公害防止機器が二次公害の発生源になってしまう例がある。ゴミ公害を防ぐためゴミ収集車を沢山作った、ところがそれに使われている油圧装置の発生する騒音で人々は悩まされている。ゴミ公害が、騒音公害に変わっただけという笑えない事実がある。どういうわけかこうなるのか。1935年、フッサールは「ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学」^⑫ の中で、『学問の「危機」とは学問が生に対する有意義性を喪失したことである』すなわち『学問一般が、人間の生にとって何を意味してきたか。また意味することができるか』という問題提起を行っている。この問いかけは、学問や技術の中での人間の復権、人間を総体としてとらえる考え方を要求している。フッサールはこの学問における人間性の喪失の源を、ガリレオが自然の数学化に成功したこととみている。ガリレオが自然の数学化をうまくやったため、その後の学問はこの方法をみならうこととなり、誤った傾向を持つようになった、すなわち、概念化（数式化、抽象化、定式化、定量化等）の際に切り落したものを忘れてしまうという傾向を持った。例えばガソリンエンジンの効率を追い求めて鉛を入れ

たこと、人間の能力を数量化して評価しようとする今の評価法、これらの考え方の中に人間性の欠落傾向をみることができる。この概念化という考え方をマルクスは、「外化」とか自然の対象化と云っており、この外化から、疎外の問題が提起されている^⑧。このように、我々の価値基準の源流に遡かのぼることは、1935年にフッサールによって、さらには1844年、マルクスによって行なわれていたのだ。したがってマルクスの疎外の問題を現在の状況の中で学んでいくことは現在の諸問題を考える上での重要なよりどころを与えてくれる。

3) 人間と自然との関係

公害問題を考えるとき、人間と自然との関係について論じられることが多い。その中にはいろいろなものがある。たとえば中教審では、これからの人間は「自然と生命に対して愛と畏敬の念にささえられ…」^⑨といている。この文は公害問題を意識して書かれたと思われるが、この考え方は、公害問題は自然を愛さなかつたり畏敬しなかつたりしたために起ったとみなすやり方である。人間の自然からの疎外の問題を愛とか畏敬の念で解決できるかの幻想を与えるものである。

経済哲学手稿^⑩の中でマルクスは、生物学的人間と自然について、人間は直接に自然存在である、受苦的に条件づけられた、制限された存在である、飢や渇きをいやすのに自然を必要としていると云っている。この生物学的事実についての考え方は、アメーバーやゾウリムシや猿にもいえることである。人間と他の生物とのちがいを、自然との関係においてどうとらえているのか。マルクスは、人間的存在という。人間は自然的存在であることを自分で知っているというのである。人間は自然を対象に働きかけるともいう。これが労働である。さらに類的存在という概念を使ってこれを説明するが、共同体による協業体制（これは後に述べるように分業体制でもあるが）すなわちそういう社会性をもって自然に働きかけていく存在だというのである。

人間はそれ自身自然的存在であり、自然なしには生きていけない。この面だけをとらえれば、中教審のいうように、あるいは古代人のように、太陽を拜み、嵐を畏れていなくていけない、しかし人間は、意識的にその自然を対象として働きかけていく、自然を対象化していく、しかも社会を通じて。この働きかけの仕方の中に、公害や自然破壊の源を見い出さなくてはいけない。人間と自然との相互関係の仕方に、いいかえれば、共同体＝社会、あるいは労働の在りかたに問題があるといえる。この事をもう少し具体的にみしてみる。

3) 人間の自然へのはたらきかけと自然破壊

「受苦的に条件づけられた存在としての人間」が生きていくためには、自然に働きかけなくてはならない。

人間は自然に働きかけることによってはじめて人間となった。ワロンの認識心理学^⑪によれば、人間と動物とのちがいを人間の対象化する能力に求めている。この能力によって人間が人間らしくなっていくというのである。これは人間の脳についていっているのだが人類の歴史自体も自然をどれだけどのように対象化してきたか、という面からみることができる。フッサールは、ガリレオがはじめて数学的手段によって自然を対象化する方法を切りひらいたとみているのだ。たとえば、電気現象も全く数学的記述で対象化された。もともと電気現象は人間の存在とは独立に存在するものであるが、人間が電気現象を対象化してはじめて、人間にとって存在するものとなった。このようにすばらしい対象化が、自然破壊や公害の根本原因なのか。ヘーゲルは対象化＝疎外としたと云われるが、むりからぬ話である。まえがきで紹介した「文明の進歩には公害はつきもの」という考え方はヘーゲル流といえる。

植物の繁茂が、かつて大気中に酸素を大量に作りだしたように、今は、人間の盛んな営みが炭酸ガスを異常にふやしているという説がある。このような面ではたしかに対象化＝疎外ということがいえる。それでは農業における農薬汚染の問題はどうか。たしかに、食糧をわがものとしようとする行為が食糧を疎遠なものにするという疎外現象が起っている。これをみても、人間が自然を対象化しつづけること自体の中に自然を疎遠なものとする原因がひそんでいるようにみえる、しかしそれが顕在化するか否かは別の問題であるとするのがマルクスの立場である。われわれ人類は、自然に働きかけかつ自然を疎遠なものにしない方法を見つけべきだ……これがマルクスの立場である。

4) 人間と人間との関係における非人間性

対象化（外化）＝疎外となる原因を、マルクスは、人間関係（生産関係）にみる。（フッサールは、学問の人間性喪失にみたといえる。）この人間関係が非人間的になっていることに原因をみる。さらに、この人間関係の具体例を労働や貨幣さらには、商品、分業などの中に見ていくのである。

マルクスは人間の人間に対する関係もまた人間と自然との関係の重要な例とみる。特にそのうち男の女に対する関係をみることによって、人間がどれだけ自然的になっているかをみることができるとしている。

4-1) 労働にみられる疎外

労働者が自然をわがものにするため自然にはたらきかける、しかし、ますます自然は疎遠なものとなる。労働はほんらい自然への自由なはたらきかけのはずだとマルクスは考える。しかし労働は苦痛で不快なものとなっている。ほんらい自由な生活活動としての労働を、生存の為の苦痛な一手段にすぎなくしてしまう。

或る電器メーカをオランダの王女が見学した、しかし作業している人達が誰れも振りむいてくれなかった。そのため、王女は機嫌を悪くした、というエピソードが生れた^④。このようにオートメーション工場のラインに立つ労働者は王女を振りむいている暇がないくらい忙しく働かされている。マルクスはいう。「労働の中で自分を肯定せず不幸と感じる」「労働の外でやっと自分をとり戻す」（現代は労働の外でも疎外されている。）「労働の中では自分の外にいる」「労働の中では彼は自分自身でなく他人に属する」「飲食、生殖においてただわずかに自由を感じるにすぎない」、しかし現在はこれさえ自由でない。有毒色素の入った食品、PCBの入った魚や母乳、合成保存剤の入った酒・ビール。子供を生むと借家を追い出され、職場を追い出される。人間たろうとする労働が「人間を動物的」にしてしまうことはおろか、動物以下にさえしてしまうのが今の状況である。

人間の自然へのはたらきかけである労働において疎外があるということは、人間と自然とを疎遠なものとし、労働のために組織された、国家、法、宗教、科学、芸術等々をすべて非人間的なものにしていく。ニセモノ（誇大広告の横行、ヒ素入りミルク、欠陥車、空気さえも、列挙すればきりが無い）の世の中、タテマエと本音との対立する世の中、その根源をここにみる。このような疎外を止揚する方法として、マルクスは、私的所有の廃止を説く。私的所有の具体的手段の象徴として貨幣がある。

4-2) 貨幣にみられる人間性の喪失—価値の基準

マルクスはいう、貨幣は人間の要求と対象との間のとりもち役である。貨幣は人間の外化された能力である。

現在の価値の基準は貨幣（お金）である。貨幣が価値をきめているようである。人間の行為は貨幣を媒介としてあらわされ、貨幣を媒介として評価される。人間の好意、愛情、憎悪も貨幣で表現される。人間と自然との直接のむすびつき—喰うこと—は貨幣によって維持されている。金がなければ喰えない。水も飲めない。最近では良い空気さえ吸えない。人類は種々のものをわがものとしたけれど、貨幣がなければよそものにすぎない。

貨幣経済（商品経済＝分業）は人類の生活を推進し

てきた。しかしその為人間性を犠牲にしてきた。日本の民話を素材にした戯曲「夕鶴」はそれを象徴的にあらわしている。人間は美を美とし、愛を愛として価値判断できなくなっている。金に換えなければわからない。与ひょうは金を手に入れたかわりに、愛を失った。美しい織物を金に変えようとつうに織らせたとなんつうは空へ消え去った。人間は貨幣経済によっていろいろなものを手に入れたが、気がついて見れば、人間性を失っていた。

このようなことをマルクスは次のようにいっている。人間を人間として、また世界に対する人間の関係を人間的な関係として前提したまえ、そうすれば君は、愛をただ愛とだけ信頼をただ信頼とだけ交換することができる。

4-3) 貨幣で換算しない価値基準とは何か

昭和46年11月15日水俣市湯堂の渡辺栄蔵氏宅で水俣病患者訴訟派と島田チッソ社長との会見が行なわれた。その記録^⑤の一部をみってみる。

平木甲子 さっき社長は会社の責任は自分の責任だと云ったでしょう。

社長 はい

平木甲子 会社の責任は社長にあるなら遺族の補償は当然社長の命令によってすべきです。

田上義春 何ですかあの裁判の内容は。

平木甲子 だから私がいうように、裁判所ではっきり、自分の会社はこういう過失をして人を苦しめたということは、自分に責任があるんだから、私がそれを全面的に認めます、といってもらえばそれでいいんですよ。ほかのことはいう必要はないんです。

田上義春 そうですよ。それ、それ。

平木甲子 それでなかったら、人間を生きて返して下さい。そしたら文句ありませんから。

田中義光 返さんでもよか。ここで水銀を思うこし飲んで下さい。金もいらん。人間も返さんでもよか。ここであなたが水銀を飲んで見せる度胸があれば、私はもう何もいいません。

社長 それではまことに恐れ入りますが水銀をお持ち下さい。

……… 略 ………

釜時良 あなたの命を一千万円で売りますか。

社長 いや、今は売りません。

釜時良 売らんでしょう。じゃあこの償いはどうしていただけますか。

貨幣経済の中で生きる我々は、美、愛、誠意、健康、命さえも金に基準をおかないと、その価値がわか

らなくなっているし、そうしないと評価ができなくなっている。この水俣病患者の怒りは、島田チッソ社長に代表される現代の価値基準、価値観への挑戦であり、のろいである。この場面に公害問題と価値観との関係が集中的にあらわれている。私が昭和47年12月に行なった本校中・高校生に対するアンケートの中で、水俣病患者の一部の人達は、チッソ幹部に「金はいらぬ、水銀を飲め、！」と迫ったことがあります、これについてどう思いますか、という質問をしたところ、と

んでもない人達だとした者わずか1名(84名中)、その通りだとした者が29名(約34%)もいた。四日市公害の裁判をはじめ患者が補償金を勝ち取る場合が増えてきたが、健康を金に換えた、青空を金に換えたという反省がだんだんされるようになってきた。

これらの例にみるように、金が価値基準になっていることへの挑戦と、新しい価値基準の創出は公害問題の中からもなされようとしている。すなわち疎外から生れた価値観は疎外の克服の中で克服されていく。

水俣病^⑥ —— 疎外そのもの ——



5] 疎外の原因

マルクスは労働にみられる疎外を私的所有の結果としてとらえたが、さらに、私的所有は、外化された労働の必然的帰結であるとした。外化された労働の原因が私的所有であるよりもむしろ、私的所有を外化された労働の帰結とみた。疎外は、私的所有によって顕在化し促進されるとみるべきであろう。

外化された労働が他の人間に属すること——私的所有——が疎外の原因である。自然を対象化し、生産物を作ることがなければ、私的所有は成立しない。しかし当然のことではあるが、人間の生活も成立しない。外化された労働が商品となるとき疎外がはっきりと起る。分業は商品を生んだ。分業、商品、貨幣は一つの体系であり、互いの存在基盤となっている。そして現在の我々はそれに依存している。

私的所有さえやめれば疎外が克服できるだろうか。私的所有は、労働生産物があれば可能である。しかしこの段階では潜在的可能性にすぎない。労働生産物が、商品になり、あるいは貨幣がそれを象徴するようになるとき私的所有は存在しやすくなる。いわゆる社会主義国は私的所有が生産手段においておおむね廃止されたことになっている。しかしこのように考えてく

ると、商品、貨幣が存在する以上資本主義復活の危険性は大きいと考えられる。

1966年ごろからはじまった中国の文化大革命はさまざまな問題を提起した。その中で価値観、人生観における革命という問題を提出している。商品、貨幣があれば私的所有の可能性があるということは、生産手段の私的所有廃止という下部構造の変化があっても、上部構造の一つである価値観が変わらなければ、私的所有の廃止の完成はあり得ないということである。物と精神の両面作戦が必要であることをこの文化大革命は示唆している。

6] 疎外の克服方法

6-1) 哲学上の問題

メルロポンティーはいう。単に物質の弁証法を考えるというその便法によって、あらゆる哲学は、物の弁証法に対して、イデオロギー、錯覚、さらにはごまかしの地位になり下った。^⑦ このメルロポンティーの嘆きは一面の真理がある。

マルクスは、主観と客観の対立というドイツ古典哲学の古い問題に対して、哲学者は自分を——つまりそれ自身疎外された人間の抽象的姿を——疎外された世界の尺度として立てたから、この対立が消えず、むしろ

忠実な現実の反映としてつかみだしているのだといった。そしてこのタテマエと本音のある世界の解決は私的所有の廃止にあると説いたわけだ。すなわち哲学の問題は純粹哲学の中だけで解決されなかったのである。私的所有の廃止は、政治的経済的問題でもあるからだ。

フッサールのいう哲学者の任務には、人間性が成立するための諸条件を定義し、人々にそれを認識させることだというのがある。

ほんとうにその諸条件を人々に認識させるには、政治力、軍事力、教育の力等をもって実践し、その諸条件を示さなければいけない。このような意味で、マルクス以後の哲学はそのような実践のうらづけがなければ単なるおしゃべりにすぎずごまかしの地位になり下ったといわれても仕方がない。マルクス哲学といえども、ただ机上での論議は、メルロポンティエのいう、哲学の握りつぶしである。

マルクス哲学の発展的実践は中国において行なわれている。疎外の止揚に関する論議の去就は、社会的実践によってもたらされるだろう。公害の克服がその一つでもある。

中国では、物質と精神の問題とその相互関係ははっきりされつつある。物質は精神とは独立に存在するという立場に立ちながら「精神的エネルギーが物質的エネルギーに転化する^⑩」というように人間の主体性、主観性の役割をも考慮に入れている。

6-2) 中国におけるところみ——新しい価値観——

プロレタリア文化大革命をきっかけとして、中国では一大実験が行なわれている。精神面での改革は、価値観の大転換である。これは斗私批修というスローガンであらわされている。物質面での改革は、三大差別の克服である。三大差別とは、肉体労働と頭脳労働、農業と工業、都市と農村のことである。^⑪

まず価値観の転換は西洋合理主義の批判から行なわれている。

デカルトの方法論としての合理主義が個人主義や利益追求と結びついた産業革命の結果、いかに効率よく生産を高めるかという、手段が目的となったような考え方が定着したと、中国では考えるのである。^⑫

この合理主義と利益第一主義のむすびつきは、人間を一つの役割のみにみて、限定して利用しようとする。すなわち分業や専門家の誕生である。効率よく生産するためには専門家を作っていた方がよいのである。すなわち人間は生産効率に従属してしまう。教育にこの考えが反映されたものが中教審路線と呼ばれるものである。高校の「多様化」がこれである。また公害を生んだのもこの「効率」である。

中国では、これに対して毛沢東思想を対置させる。

合理主義のもつ分析、実験の方法を採用しても、その政治を無視しない。誰れのための合理主義かを考える。

人間の価値を役割や機能によって判断しない。その人がどれだけ労農兵に奉仕するかによって評価される。

教育も、したがって、専門家をめざさない、人間の能力の全面的開花を狙う。軍事も工業も農業も政治活動もやる。^⑬

物質的豊かさが人間解放のめやすという考え方は、目的と手段の逆転と考える。生産を上げるのは人間のためである。従って生産のために水俣病や四日市ゼンソクを起していたのでは本末転倒と考えるのである。したがって工業水準の測定基準も、労働者や農民がどれだけ解放されたかということにおかれる。このような測定基準からは労働の疎外は起りえない。

公害問題によく出る採算という考え方がある。曰くヘドロを海へすてた方が採算がとれる、排ガスを処理してはとでも採算があわないと。この採算に対しても、誰れのための採算かを考えるのである。国家全体、人類全体の採算を考える。したがって大自然から得たものはあますところなく使う。これが資源利用に対する考え方となる。

さきにみたように疎外を助長するものとしての分業化に対しても自力更生という考え方を対置させる。自分達のいるものは原則として自分達で作るというものである。農村の人民公社では工場や発電設備を持ち、トラクターの修理などは自分達でやる。工業地帯でも農業をやり自分達の食糧はできるだけ確保する。これらのやり方は「効率」よりも、人間の能力の全面的開花を狙い、都市と農村の差別をなくすことを狙っている。

日本における公害の一つの原因はこの分業化にある。食糧を例にとる。農民は商品としての米を作る。食物としての米ではない、農民は商品としてのトマトを作る、食物としてのトマトではない。他人が喰うのだからどんどん消毒をし農薬汚染は気にならない。一方工場は、工業製品を作る際に廃液を川や海や湖に流し、魚や米を喰えなくしても平気である。工場に働く人達は食糧がどのようにして供給されるか具体的には関与しないからだ。工業は農漁民を犠牲にして成り立っている。水俣、四日市を見よ。新潟、静岡を見よ。発電所建設を例にとる。山村や漁村に発電所を作る。その電力は都市へ行く、残る煙と水没家屋は漁村、山村でひきうける。都市生活は、農漁村の犠牲の上に成り立っている。そして農漁民は喰えない食糧を都市へ送る。これが日本の分業の現状である。たしかに「効率」はよい。

7) おわりに

公害問題を中心にその根底に横たわる、物の考え方について、疎外概念をよりどころに検討をしてきた。公害をもたらす、教育の荒廃をもたらす根は同じ、疎外された基準すなわち人間性を無視した基準にもとづく、価値観、能力観、人間観、効率主義、合理主義等々であることを述べてきた。

こんどさらに、この概念をメスとして、この循環を断ち切るよう、教育の面から、その方法を考えていきたい。

参考文献と注

- ① フッサール ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学 中央公論社 (1970)
- ② マルクス 経済哲学手稿 大月書店 (1970)
- ③ 中央教育審議会最終答申 今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について、第一編第一章、今後の社会における学校教育の役割 (1971)
- ④ ワロン 認識過程の心理学 大月書店 (1969)
- ⑤ 石牟礼道子編 わが死民 現代評論社 (1972)

- ⑥ メルロポンティール 眼と精神 P193 哲学をたたえて みすず書房 (1969)
- ⑦ 北京周報 1971 4号
- ⑧ 金治 潔 '70年の工業発展の見方と今後の方向 プロ文革の本質④ 月刊軍事問題 1971. 5. 第88号
- ⑨ 毛沢東 五・七指示 1966年5月7日
- ⑩ 公害教育について 名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要17集 1972
- ⑪ 対談・合理化の質的変換と労働運動 技術と人間 第3号 1972秋
- ⑫ たとえば、科学と労働を結ぶ教育改革 朝日新聞社 1972
- ⑬ 公害教育の方途をさぐる (本紀要) 中の中学生の作文
- ⑭ 朝日新聞 1971. 6. 15付 教育改造 4
- ⑮ たとえば、教育方法の現代化 名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第15集 (1970) 第16集 (1971) に問題点の指摘がある。
- ⑯ 1972年8月四日市市で開催された、第2回公害と教育全国集会会場で展示されていたものを撮影。上段左端は、水銀によって侵かされた脳の断面。